

「褒め上手になりたい」

国立病院機構千葉医療センター

整形外科医長

大河 昭彦

医師の経験年数を重ねると、後輩をいかに指導するかを考えるようになります。自分を指導して下さった先輩への恩返しとして後輩に技術を伝えようと思うようになります。

私は30年目の整形外科医です。私が研修医のころは、上司が執刀したことにして研修医に執刀させるということが普通に行われていました。執刀したことのない手術でも執刀させてもらったことで今の自分の技術があります。インフォームドコンセントの概念が定着した最近では、そのようなスタイルはだんだんとりにくくなっていますが、チーム医療として説明を行った医師が責任をとりながら若手医師が主に行うというスタイルで何とか手術経験を増やしていけるようにと考えています。

手術技術の習得には多くの経験が必要です。責任を持って経験しないと見えてこないところがたくさんあります。見て覚えろといいますが、いわゆる鉤引きである3番手4番手の助手で見ているだけではできるようになりません。次に自分の術者が回ってくると思って助手に入れば学ぶものがたくさんあります。術者を経験すれば各場面で術者が助手に何を行ってもらいたいかも考えることができるようになります。手術助手としても上手になっていきます。うまくいかなかったことあるいはヒヤッとしたことは特に大きな経験になります。術中のトラブルへの対処というのは経験しないと身につかないものです。患者に対して責任を持った立場で経験してはじめてその事象を反省する気持ちが生まれます。上司が簡単に対処してくれしまうと記憶に残らない可能性があります。想定外の事態が生じた場合にある程度自

分で考えて対処させる必要があります。こういったことから、手術技術を効果的に習得してもらうには、数多く経験させる、自分がリカバー可能な範囲にあるうちは取り上げずに見守る、といったことを心掛けています。

私の娘が小さい頃から競技レベルのテニスをやってきましたので、効果的な指導とはどういったものか親として考える機会が多くありました。子供のスポーツの世界ではとにかく褒めることが技術成長に大きく影響するようです。日本人の文化としてはよくないところを指摘してそれを修正させるという方針が指導の中心であるように思われます。現にそういう方針のスポーツ指導者は多くいます。修正すべき点を同時に2つも3つも指摘されると修正しにくいものです。あれもこれも直せと言ってもなかなか直りません。最も効果的と思われる1つのことを修正点として伝えたと修正がうまくいきます。しかし、よくないところを指摘するよりも、いいところを指摘してそれを伸ばすというやり方のほうが上達の早道のようなのです。

大人の医師の技術指導と子供のスポーツの指導とは同一に話ができないのは当然ですが、ものごとを習得し上達するための心理学としては同じことが言えると思います。若いころ上級医に褒められてやる気が出た経験は皆様お持ちだと思います。上司に褒められた手術はその後術中のシーンが頭に残り、大きな経験として加わります。

私はもともとひとを褒めるのが得意ではないのですが、若手のいいところはどんどん褒めて褒め上手になりたいと考えています。